



# ミルクナース

MILK-NURSE

幸せにゆ〜いん生活

小説 神崎美宙  
挿絵 中乃空

立ち読み版

序章	
第一章	聞いて驚けミルク医学！
第二章	お嬢様のミルクマッサージ
第三章	ミルク治療で初体験
第四章	ミルクキスのお味
第五章	一途な従妹
第六章	受けて幸せミルク医学！
終章	
	249
	211
	176
	131
	096
	053
	017
	006

## 登場人物紹介

Characters



### とうじょうじ えり 東条寺愛里

東条寺総合病院の院長の孫娘。ナースとして働いていて、プライドが高く負けず嫌いだ。実はかなりの寂しがり屋である。Gカップ。



かみしろ

### 上代ユキ

看護学園に通いながら病院で働いている修也の従妹。上品で物静かで、礼儀正しい少女。小さい頃から修也になつていた。Dカップ。



### きさらぎ みか 如月美香

「ミルク医学の権威」を自称する美人女医。明るく陽気でノリが良いお姉さんタイプの性格で、親身に修也のことを心配してくれる。Eカップ。

### かみしろしゅうや 上代修也

不治の病で倒れ、東条寺総合病院に運び込まれた青年。

## 序章

「……………うん、んっ…………こ、ここは…………」

白い天井と白い蛍光灯の光でぼやけていた視界が徐々にクリアになっていく。

そして白いシーツに白いベッド、白いカーテン。

全てが真っ白な光景が広がっていた。

この見知らぬ空間が病院の一室だということに気づくには少し時間がかかった。

(なんで、僕はこんなところに…………)

かみしろしゅうや  
上代修也は必死に記憶を辿ってみるが、なぜ病院にいるのか思い出せない。

「うっ…………」

身体の節々に痛みが走り、全身を気だるさが襲う。上体を起こそうとしても、身体は言うことを聞いてくれない。

意識は覚醒しても身体がシンクロしないもどかしさを感じながら、しばらく呆然と天井を眺めていると――。

ガチャリ――。金属のドアノブが回る音と共に、室内に一人の女性が入ってくる。

「あら、目が覚めたのね？ よかったわ…………」

その女性は綺麗に整った美貌を綻ばせながら、腰まで伸びたウェーブのかかった茶髪を揺らしベッドに近づいてきた。

裾の長い白衣を身にまとい聴診器を首から下げている。女医だろうか。そんなことを考えていると、美女はスツと頬に手を伸ばしてきた。

「君、通学中に倒れてここに運ばれたのよ。覚えてるかしら……？」

ひんやりとしたスベスベの指先がほっぺをなぞり、美女の顔が近づいてくる。

細い眉とパッチリとした二重まぶたに縁取られた瞳は、宝石のように輝きを放ち見る者を吸い込んでしまいそうなほど澄んでいた。シャープな輪郭と整った鼻筋は仕事のできる女といった雰囲気を漂わせている。

「え、あつ……が、学校……」

それだけでなく赤いルーージュをひいた唇は肉感的で、大人の女性らしい魅力を持つ美女に見つめられたせいで鼓動は一気に跳ね上がった。

「そうよ。ここは君の通ってる学校の近くにとうじょうじある、東条寺総合病院よ。名前くらい知ってるでしょ？」

混乱する少年を落ち着かせようとしたのか、先ほどの色っぽい笑顔から一変して人懐っこい少女のような笑みを見せる美人女医。歳は二十代後半くらいに見えるが、いくつもの表情を見せる彼女に少年の心は惹かれていった。

「あ、はい……知って、ます……」

通学中に倒れたことより、そして学園の近所にある病院に運ばれたことよりも、目の前で微笑む美女のことが気になって仕方がなかった。

「それで、私は君の担当医になった如月美香よ。美香先生って呼んでね、修也君」

自己紹介をしながら美香は少年の顔を覗き込んだ。美顔も然ることながら、前かがみになっているせいで視界を覆うように迫ってくる巨乳の存在感に視線は無意識のうちに吸い寄せられてしまう。

白衣の中でインナーの胸元を押し上げる双乳の膨らみは、メロンでも隠し持っているかのように大きな曲線を描いている。大人の色香を感じさせる巨乳に加え、スカートは超ミニでムッチリとした太股を包むストッキングに黒のガーターベルト使用と、目のやり場に困るとはこのことだ。

「は、はい……分かりました……」

恥ずかしさを隠すように曖昧な返事をする、女医は真剣な表情を浮かべさらに迫ってくる。

「それで。早速だけど、君が倒れた原因についてなんだけどね……」

ふわふわとした艶やかな茶髪からはリンスの香りが漂い、香水と体臭が混ざった甘い媚薬のような匂いが鼻腔をくすぐった。

「あ、その前に先に治療を進めた方がいいわね……」

そう言うのと美香はキャミソールの胸元に指をかける。グッと胸布を引き下ろすとアダルトイナ黒いブラジャーに包まれた乳房が姿を現した。

「わわっ、何をしてるんですかっ……!!」

慌てて顔を背けようとするが、若い少年の視線は自然とそのミルクを溶かしたかのように白い乳肌へと惹きつけられる。

（お、おっぱいッ!? す、すごいっ……大きすぎるっ……）

目を白黒させながら少年は心の中で歓喜の叫びを上げた。

「ほら、逃げないの。私のおっぱいを吸って……」

そんな初心な反応を楽しむかのように、女医は悪戯っぽい笑みを浮かべながら腕を背中に回してブラジャーを取り去る。

惜しげもなく晒される生乳ナマチチを目の前に、思わず鼻血が出そうになった。黒いブラの矯正を失っても、お腕型をした綺麗な乳房は形が崩れることなく真横に張り出している。その頂点のピンク色をした尖りが口元に押しつけられた。

「うぶっ……で、でも、どうして……」

「いいから、私の言う通りにすればいいのよ……」

美女はベッドに腰掛けると少年に覆いかぶさるようにして、強引に乳首を吸わせながら

自分で巨乳を揉みしだいた。肌理きめの細かい乳肌はつきたての餅のようになめらかで、柔らかく舌触りもよい。

(な、なんでこんなことに……)

年上の美女に押し倒されるのは、年頃の青少年としては理想のシチュエーションだ。

しかしかなり不思議なことばかりで、修也はその悦びに浸る間もなくわけも分からぬまま突き出された乳房を舐めしやぶった。

チュ、チュウウ——ッ!

乳輪はぶつくりと膨らみ舌先にはコリコリとした乳首の感触が広がる。乳房を口に含むという物心ついてからは初めての行為に胸が躍り心臓の鼓動が高鳴った。

「そうそう、もつと強く吸っていいのよ」

状況はまったく飲み込めず一抹いちまつの不安を感じつつも、若い牡は性欲には勝てずがむしやらに女医の乳房に吸いついた。ほのかな桜色に色づいた乳房に両手を添えると、ズブズブと指が食い込んでいく。

(すごい、おっぱいってこんなに柔らかいんだっ……)

指の腹に感じる弾力と温かな揉み心地に少年の興奮は一気に高まり、さらに強く乳首に吸いついて舌で硬くなっている尖りを転がした。

「フフ……やっぱり男の子がおっぱい飲んでる姿って可愛いわね」

必死に乳房にしゃぶりつく少年の頭を撫でながら、美香はうつとりとした表情を浮かべ瞳を細める。

「それで、肝心の修也君の病気のことなんだけど……」

乳吸いに夢中になっていた修也は、ハッと顔を上げた。女医に誘われるがままに乳房を吸っていたが、病室で寝ていた理由を思い出し思わず表情が硬くなる。先ほどからあれほど夢中になって吸っていた乳房から口を離し、固唾を呑んで美女の言葉を待った。

「単刀直入に言うのと、現代医学では治療法がないの。いわゆる不治の病って言ったら分かりやすいかしら？」

「そうなんですか、不治の………はいいいッ!？」

「当然のように放たれた美女の言葉を理解するのに数秒を要した。」

「あ、あの……何かの間違いじゃないですよね……?」

こうやって突然に倒れて病院に担ぎ込まれるなんて今日が初めてで、今朝まで特に自分が病気だったという自覚もない。

「残念ながら、間違いないじゃないの。まだあまり実態が解明されてない病気なんだけど、あえて病名を当てはめるなら先天性心臓疾患といったところかしらね。このまま放っておいたら、今日みたいに心臓が機能せず倒れたり、最悪の事態になることもあるわ」

「そ、そんな……」

美人女医の胸元を見つめて鼻の下を伸ばしていた少年の顔が一気に青ざめる。理解の許容を超えた事実を突きつけられ、落ち着きかけていた思考が再び混乱してしまう。

今朝までごく普通に日常生活を送っていたのに、なぜこんなことになってしまったのかというやり場のない悔しさと絶望で少年は言葉を失った。

「でも安心して。何を隠そう私はミルク医学の権威、如月美香よっ！ 君の病気も私の研究してるミルク療法で必ず治るわ」

「……ええ!! ミ、ミルク医学? ミルク療法……?」

聞きなれない療法を耳にして首を傾げる修也だが、すぐにその意味を理解した。

「うっ?! 先生ッ、おっぱいが……」

彼女が胸を搾り揉むと乳液は飛沫となつて少年の顔を濡らした。

「そうよ。母乳、ミルク、おっぱい汁、呼び方は何でもいいんだけど、ミルクを飲めば修也君の病気は必ず治るわ。ミルクを飲むことによつて、男性ホルモンが刺激されて免疫が強くなるのよ。そうなれば自然と病気もよくなってくるの。だから今日から毎日、ミルクを飲んで飲んで飲みまくるのよ」

「そ、そんなこと言われても……」

女性の乳を飲めば病気が治る。自分が病気だということすら自覚がないのに、さらに突飛な治療法を突きつけられた少年は目を丸くして驚くばかりだった。

「それにどうして先生のおっぱいからミルクが……」

たぶたぶと揺れる乳房を揉むたびに、白い乳液は次々に溢れてくる。不治の病気だとかミルク医学とかまったたくわけの分からない展開のせいで意識が回らなかったが、そもそもなぜ美香の胸からミルクが出るのだろうか。

女医は確かにモテそうな大人の美女だが、とても妊娠しているようには見えない。

「フフフ……ミルク医学を甘く見ないで欲しいわね。私が乳腺のツボを刺激するマッサ―ジをすれば誰だつてミルク出るようになるわよ」

得意げに自身が提唱するミルク医学の素晴らしさを自慢する美香。

いまいち理解できないが美女の瞳は真剣そのもので、騙そうとかからかっているようには見えなかった。

「いいから私のことを信じなさい。ほら、たつぷり飲まないと病気も治らないわよ」

「でも、むぐつ……」

美女はマイクロミニのスカートの裾がまくれ上がるのも気にせず、ベッドによじ登り馬乗りになってくる。

さらに両乳の根元を持ち上げるようにして中央に寄せ、ミルクの滴るその先端を少年の口元へと運ぶ。

「んっ、ちゅ、ちゅううっ……むぐ、むうっ……」

乳房を鷲掴みにして手のひらに軽く握力を込めれば、口内に甘いミルクが広がる。少年は喉を鳴らして、女医の乳房から溢れる乳液を飲み干していく。

(すごい……飲んででも飲んででもミルク出てくる……)

俄かに信じがたい治療法だが、女医が言う以上医学の心得もない修也が異論を唱えることなどできなかった。

それにこうやって美女の乳房を揉み、ミルクを吸うという行為自体は童貞少年には嬉しい限りである。すでに現金な股間の逸物は硬く膨張し始めていた。

「あは、ンっ……そうよ、その調子でたくさん飲むのよ〜〜」

美香は柔らかい茶髪を揺らし、乳房を吸われる快感に喘いでいた。強く母性を刺激されたのか少年の頭を抱きしめ、満足そうに微笑んでいる。

コンコン——。

少年が病気のことなど忘れて、年上美女の乳揉みに夢中になっていると、不意にドアがノックされた。

「はあ、ンふっ……いいわよ、入っていらっしやいっ……」

女医の言葉に気づき、視線を送ると部屋の入り口から二人のナースが姿を現した。

「まったく、アタシを呼び出すなんて……な、何してるのよっ!？」

まず室内に入ってきた金髪の巻き毛の美少女が両手で口元を覆った。



「そ、それで……修也は、どうなのよ！ アタシのこと……好き……」

いきなり告白を受けたりキスをされたりして混乱していたが、頭の中は愛里のことではないになつていた。出会った時は少しキツイ性格だと思つた。しかし今は、実は仕事には真面目で根は優しい少女だということを知っている。

「あの……僕も、愛里さんのこと……好きです……」

火が出そうなほど顔が火照つて熱い。恥ずかしくて仕方なかったが、想いを告げてくれた少女に向かい、少年は首を縦に振つた。

「……ッ!! ま、まあ……アタシに好きって言ってもらつたんだから当然よね……でも、その……あの……う、嬉しい……」

修也の答えを聞いた瞬間に、お嬢様の顔は花が咲いたように喜びに満ち溢れた笑顔を浮かべた。普段のツンツンした彼女とのギャップがすごくて、思わず少年の胸はときめく。

（うわっ、愛里さん……か、可愛いっ……）

すぐに表情を引き締めているが、頬や目元は朱に染まったままで全身から喜びが伝わってくる。

「ぼ、僕も、嬉しいです……はい……」

お互いの気持ち伝えた二人の間には気恥ずかしい空気が漂っていた。しかしそれは決して居心地の悪いものではなく、胸の奥からはじわじわと両想いになれた喜びが湧き

上がってくる。

しばらく穏やかな時間が流れていた。何も話していなくても、気持ちが通じあっていると思うだけで幸せな気分になってくるから不思議だ。

「ね、ねえ……修也。あの、今日は本当にごめんね……」

「へ？ ああ、もうそのことは謝らなくても大丈夫ですよ。愛里さんが悪いなんて全然思っ  
つてませんから」

慌てて気にしていないと両手を横に振ってみせる。しかし気持ちが通じた分、お嬢様は  
余計に責任を感じているようだった。

「でもそれじゃあアタシの気が済まないのっ……だから、今からミルク飲ませてあげるわ  
よ……」

「えっ！ わわっ、愛里さんっ……」

美少女はベッドによじ登り、驚く少年の上に馬乗りになった。丈の短いスカートはまく  
れて奥にピンク色のショーツが覗いている。

突然の大胆な行動に修也はオロオロとするばかりだった。

「何よ、アタシがおっぱい飲ませてあげるって言ってるのに、嫌なの？」

「嫌って言うわけじゃ……その無理しなくても……」

少年の言葉を聞き、愛里はムスッと唇を尖らせる。

「だから無理なんてしてないって言ってるでしょ！ ほら……ちゅっ」

何かを言おうとしていた少年の口をお嬢様の唇がふさいだ。あの高飛車なナースの接吻攻撃にすっかり心は奪われ、心臓の高鳴りはどんどん大きくなる。

「……ん、ふう……いつも嬉しそうに美香やユキのおっぱい飲んでるくせに……」

「うっ……それは、嬉しそうとか……」

凶星を突かれた少年は苦笑いを浮かべるしかない。お嬢様のミルクを飲みたくないわけではなく、以前とのギャップに戸惑っているだけだった。

しかし嫉妬心を煽られたらしい少女は非難の視線を浴びせてくる。

「いいわ……それじゃあ、アタシが直接飲ませてあげるわよっ！」

ムスツと頬を膨らまし、愛里はナース服の胸元に指をかけた。上から順にボタンを外していくと、窮屈そうに押し込まれていた爆乳が左右に広がっていく衣服の間からブルンツと弾み出してくる。

（う、うわ、愛里さん……可愛い……）

女医達への嫉妬で大胆な行動に出たものの、恥ずかしさは抑えきれないのか少女の顔は赤く上気し色っぽい。

「そ、そんなに見られたら恥ずかしいじゃないのよっ……」

ピンク色の下着に包まれた爆乳を腕で隠すようにしてお嬢様は身を振る。

「でも、見てないとおっぱいが飲めないですよ……」

大義名分を得た少年はまじまじと、ミルクを溶かし込んだように白くなめらかな乳肌を見つめた。かなり大きいことは知っていたが、相変わらず生で見ると重力に逆らい張り出している乳房の圧倒的な存在感に息を呑んでしまう。

「ダメっ、アタシが飲ませてあげるから、修也は目をつむってて……」  
そう言うとき愛里は手のひらで視線を遮ろうとする。

「え、ええ？ 見えないと……」

「いいから、目をつむってて……見ちゃダメだからねっ……」  
見るなど言われると見たくなるのが人間の性さが。しかし逆らってお嬢様が機嫌を損ねるのも困るので、手で顔を覆うフリをしてこっそりと薄目を開ける。

「ん、ふう……胸、張ってきちゃった……」

色っぽい鼻にかかった熱っぽい吐息を漏らしながら自分で乳房を揉んでいた。メロンほどもあるミルクタンクは手のひらに収まらず、愛里は苦戦しつつも必死に胸を重たげに揺らしている。

（これは……絶対に見ちゃうよ……）

馬乗りになっただけのお嬢様が甘ったるい声を出しながら、爆乳を愛撫している姿はとて  
もエロくて修也の視線は釘付けだった。

「あ、アア……ンン、見ちゃダメだからねっ……ンのはあっ……」

「はいっ、分かっています……」

潤んだ瞳で少年を見下ろし、見られていないことを確認するお嬢様。普段は気が強く勝負な態度を見せる少女が恥じらうしおらしい仕草は男心をくすぐる。

「あ、あぁんっ……んっ！」

しばらくまるでオナニーに耽<sup>ふけ</sup>っているような扇情的な姿をこっそりと堪能していると、お嬢様の声色が変わった。指の隙間からお嬢様の胸元を覗くと、ピンク色をしたブラジャーの中心に白いシミが滲んでいる。

「い、今から飲ませてあげるから……そのまま目をつむってなさいよっ……」

お嬢様は顔を真っ赤にしながらくちりとブラのカップを引き下ろした。

（おおっ、愛里さんのおっぱい……）

ツンと上向いた乳首からミルクを滴らせている、白いマシユマロのようなお嬢様乳が目の前に惜しげもなく晒される。本人は見られているとは思っていないようだが、少年は内心でガツポーズを決めたくなるほど喜んでいた。

「待ってなさいよ……アタシがミルク飲ませてあげるんだから……」

しかし本当の垂涎<sup>すいぜん</sup>の光景は今からだった。愛里は自ら片乳を持ち上げると、ミルクの滲む乳頭を口に含んでちゅうちゅうと吸い始めたのだ。お嬢様ナースほどの爆乳の持ち主だ

と、自分で自分の乳首を吸うことができるらしい。

その日本人離れしたサイズを誇るおっぱいから溢れるミルクを必死に吸っている少女の姿があまりにもエロくて、心臓の鼓動はバクバクと高鳴った。

「……え、愛里さんっ！ む、むぐっ……ンンううっくくくく」

驚いた修也が思わず身体を起こしたところに、お嬢様の顔が迫ってくる。そして熱い接吻で口をふさがれた。

「ちゅ、ちゅむっ……ンは、ちゆるう、ちゆるっ……」

なんとお嬢様はミルクを口移しで飲ませてくれたのだ。生温かい舌が唇を開かせ、ミルクが口内に流し込まれる。お嬢様は口に含んでいた乳液を全て少年に飲ませると、唇を離して顔を上げた。

「ど、どう……アタシのミルク……う、嬉しいでしょ!!」

嘔然としている少年を見下ろしながら愛里は胸を張っている。しかし顔どころか耳まで真っ赤になっていて必死に羞恥に耐えているのは誰の目に見ても明らかだった。

高飛車な愛里がそこまでして自分のために尽くしてくれる。女医に言われてではなく、自ら進んでミルクを飲ませてくれた彼女の愛情がヒシヒシと伝わってきて少年の心を甘く蕩けさせた。

「すごく嬉しいです……あの、もう一回してくれませんか……?」

「え、もう一回……？ し、仕方ないわね……もう一回だけよ……」

そう言いながらも少女は嬉しそうに自らの乳房に舌を伸ばし、硬く尖っている乳首から溢れてくるミルクを舐め取って少年の口元へと運んだ。

「ちゅ、むう、ンンっ！ こらっ、舌入れちゃ……ちゅうううっ……」

一度だけと言いつつも修也がお願いすると、ナースは何度も口移しでミルクを飲ませてくれた。ミルクキスを繰り返しているうちに少年の方が我慢できなくなり、舌をお嬢様の舌に絡ませ唾液ごと乳液を吸い取る。

驚いたように身体をビクッと震わせたが、愛里はディープキスを受け止めてくれた。

「……ぶはっ、もうお終いつ！ 修也ったらエッチなんだから……ほら、おっぱい飲んでなさいよっ……」

激しいキスのせいで呼吸を乱したナースは口を離し、乳房を少年の顔に押しつける。

「んぐ、んぐっ……」

片方の乳房を修也に吸わせながら、愛里は自分で反対の乳房を吸った。そして口いっぱいにはミルクを含むと、少年が悦んでくれるのが嬉しいらしく再びキスを降らせる。ミルクを口移しで飲ませてもらっているうちに、胸の高鳴りと興奮は激しく高まっていた。

「ね、ねえ、ちよつと修也……」

その証拠に股間の逸物はいつの間にか隆起し、跨がっている愛里のヒップをグリグリと



押し上げていた。そのことに気づいたお嬢様は頬を赤くしたまま視線を下へと落とす。

「あつ……その、これは、すみません……」

修也は慌てて謝りながら腰の位置を動かした。

「べ、別に謝らなくても、いいわよ……その、興奮しちゃったんでしょ……？」

「その……えと、はい……」

怒るわけでもなく頬を染めたまま呟く愛里。変態と叱られていたイメージが強いので、何も言われないうと変な感じがする。少年が恥ずかしそうに頷くと、お嬢様の顔は火がついたようにさらに赤くなった。

「そんなにして欲しいなら……アタシが気持ちよくしてあげる……」

愛里は自慢の金髪を揺らし、跨がったままスルスルと足元の方へと移動する。そして両手で患者衣の腰紐を解いて少年の股間を露出させた。

「え、愛里さんっ、何をっ!？」

下半身をパンツ一枚の状態にされた修也は慌てて股間を隠そうとするが、お嬢様はその手を払いのける。

「いいから、アタシに任せなさいよっ……」

ついに下着まで引き下ろされ、天井に向かって硬くそびえているペニスが少女の視線の先に晒された。少女は息を呑んで完全に勃起しヒクつく逸物を見つめている。

「うう、恥ずかしいですよ……」

異性に性器を凝視された修也は堪らずに情けない声を漏らした。

「な、何言ってるのよっ……嬉しくせに、ほら、これが気持ちいいんでしょっ……」

ナースは勃起した逸物の根元を持ち、先端に舌を這わせる。生温かくザラザラとした舌先の感触が敏感な亀頭をなぞり、下半身から全身に甘い痺れが走った。

「はうっ……愛里さんっ、く、ううっ……」

「ちゅ、ちゅる……修也のここ、ビクビクしてる……」

身もだえする少年を上目遣いに見つめるお嬢様は満足そうに微笑む。鼻息を感じるほど股間に顔を埋め、チロチロと何度も舌尖でキャンディを舐めるかのようにペニスの先端を責め続けた。

そのたびに先日童貞を卒業したばかりの若い牡棒には甘美な刺激が流れ込んでくる。

「変な味ね……嫌じゃないけど……ンちゅ、ちゅぶぶっ……」

舌奉仕が少年を悦ばせていることに気をよくしたナースは、ミルクの滲む爆乳を太股に押しつけながら小さな唇をいっぱい開いて肉棒を呑み込んでいく。

「うああっ、む、無理しないでくださいっ……」

熱い口内にペニス全体が包まれ、裏筋が舌粘膜と擦れあう。唾液が竿中に絡みつき、あの高飛車お嬢様がフェラチオをしてきているという事実に興奮し胸は高鳴る。

「うわっ……こ、これは……」

「ねえ、今度は……そのお、ユキとね……エ、エッチして欲しいの……」

遠慮がちに告げられた少女の言葉が少年の胸を打つ。

「は、はいいいッ!? ユキ……ほ、本気で言ってるの……」

突然の申し出に言葉を失っている少年を見て、ユキは上目遣いに見つめながら矢継ぎ早に言葉を続けた。

「先生も言ってたんだよ、おにいちゃんがエッチなことをしたいって思うのは病気がよくなってる証拠だって。だから、ミルクを飲むのも、エッチするのも……全部ユキにして欲しいのっ!」

必死に想いをぶつけてくる少女の瞳の端には涙の粒が浮かんでいる。緊張からなのか心なしか肩が震えていた。

「ユキ……僕の病気のために色々してくれて本当にありがとう。でもそこまで無理しなくてもいいんだよ……」

思い出せば病気で倒れてこの病院に担ぎ込まれて入院してから、ずっとユキには世話になりっぱなしだった。通常の看護以外にもおっぱいを飲ませてもらったり、溜まっている性欲をフェラチオで解消してもらったりもした。

そして今や処女も捧げてくれようとしている。気持ちは嬉しかったが病気のためにそこ

までさせていいものかと思った。

「無理じゃない！ 無理じゃないもんっ……」

少年の言葉強い口調で否定して、ユキは従兄の胸に飛び込むように抱きつく。

「う、うおっ……ユ、ユキっ……」

倒れそうになりながらも彼女を抱きとめると、潤んだ瞳と視線が交錯した。見習いナースの小さく細い身体はとても柔らかくて、ほんのりと温かくて甘い香りがする。

「おにいちゃんのこと、ずっと前から好きだったんだもん……そうじゃなかったら……おっぱいとか飲ませてあげたりしないよお……おにいちゃんが病気になるなくても、ユキの初めてはおにいちゃんにあげるって決めてたよ」

「ユキ……本当に……」

吸い寄せられるように両手が少女の肩に触れていた。心臓の鼓動は痛いくらいに高鳴り、興奮で呼吸は荒くなる。

（そんなに僕のが好きだったのか……）

ずっと妹のような存在だったせいで気づかなかつたが、思えば一途に自分へ好意を向け続けてくれた従妹。本当の気持ちを知った今、溢れてくる感情を抑えきれず自然と裸エプロン姿で横たわる従妹の身体を抱きしめていた。

「それなのに……おにいちゃんったら愛里さんと……ユキだって負けないもん。おにいち

やんにユキのこといっぱい好きになつてもらいたいもん……」

そう言つてユキは頬を赤らめながらギョツと目を閉じる。いくら鈍感な少年でも彼女が求めていることくらい分かった。

二人は唇をそつと重ねあう。

「ンちゅ、おにいちやあ……ん、ちゅむ……ンンっ……」

何度かキスを繰り返して舌先で唇をつつくと、ユキは戸惑いながらも口を開きディープキスを受け止めてくれた。勢いあまつた二人は抱きあつたまま、床へと倒れ込む。

横たわつた裸エプロン姿をした見習いナースの瞳は不安げに揺らめく。あんなに大胆に誘惑し迫つてきたが、背伸びはしてもやはり年頃の少女だった。

「大丈夫だよ……優しくするから……」

少ない性体験で得た知識を必死に脳内に巡らせながら、もう一度キスをする。

「うん、大丈夫……きて、おにいちやん……」

少女は意を決したようにそろそろと両足を開いていく。エプロンがまくれて薄い陰毛と、まだ成熟していない女陰が視線の前に晒された。

（ゴクツ……こ、これがユキの……）

童顔の少女らしい淫唇は一本の筋のようにピタリと閉じており、独特の甘酸っぱい香りが鼻先をくすぐる。本能が牝の匂いに反応して鼓動が激しくなっていく。

「そ、そんなに見ないでよお……早く、お願い……」

顔を真っ赤にしたユキは恥ずかしそうに内股をすりあわせた。少年の視線に耐えられなくなったのか足を閉じようとする。しかし股間に身体をねじ込ませてそれを防いだ。

「分かった……それじゃあ、挿入れるよ……?」

「うん……いいよ……おにいちちゃん……」

ギンギンに勃起した逸物を膣口に押しつけると、ユキはハッと目を見開く。それでもすぐにはつきりと頷いてくれた。

入り口を探り当てた亀頭が処女肉の中へと進入する。

「ああ、ひいっ……ううっ、い、いっ……」

膣口の奥へと肉棒が進んでいくと、ユキは長い睫毛を伏せ小さく悲鳴を上げた。

そして両手を伸ばしギョッと抱きついてくる。

「だ、大丈夫?! 抜いた方がいい?」

驚いた修也は思わず腰の動きを止めて顔を覗き込んだ。しかし少女は目をつむったまま首を横に振る。

「イヤッ! 抜いちやダメ! ユキは大丈夫だから、続けて……」

そう言いつつも背中に回った彼女の手が力がかもっているのが分かった。

無理をしているのは誰の目にも明らかだ。それでも自分と交わることを一途に望んでい

る少女がいじらしい。

「じゃあ、ゆつくりするから……本当に痛い時はちゃんとやってね……」

湧き上がる興奮を抑えつつ、できるだけ優しく腰を動かしていく。するとユキの反応に少しずつだが、変化が現れる。

「ひいつ、きゃひいんっ!!」

甲高い悲鳴と共に少女の身体の強張りが一気に強くなった。再び腰の動きを止めて股間を覗き込むと、結合部からは処女の証が一筋太股を伝っている。それを見た瞬間に、彼女の初めてを奪ったんだという実感がふつふつと胸にこみ上げてきた。

「お、おにいちゃん……おっぱいも、おっぱい飲まないと……」

破瓜の痛みで歪む顔に、必死に笑みを浮かべながら華奢な身体に不釣りあいな巨乳を自ら中央に寄せ上げる。

「うん……分かったよっ……」

胸布を中央に寄せ露出させた左右の乳房を両手で揉み搾った。

ぴゅるっ……ぴゅう、ぴゅっ……ぷしゅ、ぴゅううっ……。

握力を込めるたびに十本の指が乳肉に食い込み、薄ピンク色の乳頭から白いミルクが勢いよく噴き出す。

「あ、あんっ……おっぱいが痺れちゃう……」

黒髪の少女は身を振らせながら切なげな視線を向けてくる。少年はそんな彼女の反応を確かめながらぷつくりと膨らんだ乳首を口に含んだ。

愛里のと比べると味は少し薄め。それでも甘くてしつこくないサラサラとした乳液は喉を通り全身に染み渡っていく。何だかそれだけで身体が熱くなる。

「はぁん、おにいちゃん……いいよ、もつといっぱい飲んでえ……」

ミルクを吸うたびに可愛らしい声を上げるユキ。そんな彼女をもつと感じさせたくて、夢中になって乳首を吸った。舌先で転がしたり歯で甘噛みしたりと拙い性知識をフル活用させてぎこちない愛撫を繰り返すと、少女は相変わらず恥ずかしそうに頬を染めながらも甘い声を漏らしている。

（あ、ユキが感じてくれてる……）

少女の感情が傷みだけでなくなったことを感じた少年は中断していた腰の動きをゆつくりと再開した。

キツイ締めつけの中をペニスが行き来し、ナースの身体が大きく跳ねる。

「きゃうっ、は、激しいっ……ああ、んはあっ……」

膣奥への刺激にはまだ慣れていないらしいユキは、腰突きを受けるたびに甲高い悲鳴を上げた。左右の乳房を交互に吸い、反対の乳肉を手のひらで揉みながら腰を動かし少女の喘ぎ声を聞いていると自然に興奮が高まってくる。

ズリュ、ズツチャ、ズニユ、ズツチャ！

「どう、はあ、ああンっ……気持ち、いい？　ンひ、おにいちゃんっ！」

「気持ちいいよ、すごく気持ちいいっ！」

少年が何度も頷くと見習いナースは嬉しそうに目を細めた。その表情が愛しくて、少年の牡の本能に火がつく。

処女の彼女を労<sup>いたわ</sup>っていたつもりだったが、無意識のうちに腰の動きはスピードを増し突き上げは力強くなっていく。

「ひ、いい、ああン！　そんなに奥ばかり突かれたらっ……はあ、ン、頭が変になっちゃうよお……ああ、ひいんっ!!」

色気を帯び始めている嬌声と粘膜の擦れあう水音が響く。浴室の中で反響してより大きく響く淫らな旋律が少女の羞恥心を煽る。

頬だけでなく顔全体が上気し、雪のように白い全身の肌も赤みを増していた。

「ユキも気持ちいい!!　はあ、ユキもっ……」

「……あ、ああ……うん、いいっ……気持ちいいよっ……」

興奮で腰の動きは激しくなりペニスは狭い膣肉を乱暴に抉る。結合部から蜜は溢れているが、処女の彼女には刺激が強すぎるのは分かっていた。

それなのに気持ちいいと何度も頷き、乳房を揉み回す少年の手のひらに自分の手を重ね





華奢な少女の身体が小刻みに震えていた。

ぷしゅ、ぴゆるるっ！　ぴゅ、ぴゅ、ぴゅう——ッ！

まるで噴水のように噴き出し溢れてくるミルク。とろんと蕩けた美少女に見つめられながら、修也は絶頂に達した。

ビュル！　ビュブブ、ビュクビュク!!　ビュブブウウウウウウウウウウウッ!!

尿道を駆け上がる精液を止めることもペニスを膣から抜き出すこともできず、処女肉の一番深いところに欲望の塊を吐き出した。

「ンひいいいいいっ!」

少女の背中が床から離れ弓なりに仰け反る。そして声にならない声を上げながら、少年の腕にしがみついていた。

「う、ううっ……止まらないっ!」

「ああ……おにいちちゃんのが、お腹の中に入ってきてるううっ……」

ユキにも絶頂の波が断続的に襲ってきているのか、射精をしている間ずっとミルクを溢れさせている。

しばらく二人とも無言のまま絶頂の余韻に浸っていた。

「はあ……う、あつと……」

射精が終わると強烈な脱力感に襲われ、少年は倒れ込むように見習いナースの身体に覆

いかぶさった。

「だ、大丈夫、おにいちゃん……？」

「うん……ちよつと疲れただけ……ユキは大丈夫？ 痛くない……わけないよね……」

少年が心配そうに声をかけると、少女は嬉しそうに首を横に振ってギョツと抱きついてきた。

「少し痛いけど、平気。それよりおにいちゃんと一つになれて嬉しい……」

「ユキ……」

どちらからともなく二人はもう一度唇を重ねた。

「ほら、おにいちゃん。ちゃんとおっぱい飲まないとまた倒れちゃうよ」

セックスを終えた後ミルクまみれになってしまった身体を洗い病室に戻る途中。ユキはおっぱいを二の腕に押しつけて抱きついてくる。

「ちよつとユキ歩きにくいよ……それに、さつきいっぱい飲んだよ……」

「ダメー！ 病気が治るまで、油断しちゃダメだよっ！」

むうつと唇を尖らせてこちらを見つめてくる見習いナース。身内の鼻根目を抜きにしても可愛い顔が真剣な眼差しを向けてくる。そんな顔をされては頷くしかなかった。

「わ、分かったよ……」

「えへへ、いっぱい飲んで早く元気になつてね……」

少年の世話をやけるのが嬉しいのか少女はご機嫌な様子。

身体を心配してくれるのは嬉しかったが、どうしても気になってしまうのは金髪お嬢様のことだった。従妹の少女から告白を受けて処女をもらったことを聞いたら——眉をツリ上げ怒っている愛里の顔が瞬時に脳裏に浮かんだ。

「うーん、やつぱり……決めた！ 愛里さんなんかには、おにいちゃんをあげない！ おにいちゃんの恋人にはユキがなるもんっ!!」

「ぶっ……い、いきなり何を……」

少年の意識が自分のこと以外に向いていることに気づいたのだろう。ユキはワザと大きな声で、突然恋人になると宣言する。

「えー、いきなりじゃないよ。ずっと前からおにいちゃんのこと好きだもん。それにもうエッチもしたんだし、責任取つてよね、おにいちゃん♪」

「う、うう……それは……」

満面の笑みで見つめられ、思わず口ごもつてしまう。脳裏には金髪お嬢様のことが思い浮かび心の中で頭を抱えながら、病室に入ると——。

「あっ！ 修也、どこに行つたのよ!? ……つて、何くつついてんのよ!!」  
今まさに脳内に浮かんでいた少女が、落ち着きなく病室内をウロウロとしていた。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

# ハーレムシリーズ

## 公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、  
「歴史年表」「人物相関図」  
等々あの超人気シリーズの  
世界観を網羅した  
**完全ガイドが登場!!**

特別描き下ろし  
イラストも多数収録!



*Now On Sale!!*

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

二次元  
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

二次元  
ドリームノベルズ

サイズ:新書

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
公式サイトにて!

<http://ktcom.jp/>

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!